

記念講演会 第I部

講師

増澤空氏

# 「民間教育と私」 地球の未来なしに、 子ども未来はない」

熱気に包まれた会場の様子



学習塾は、  
雑木林的なものである

本質的な問題ですが、そもそも学習塾（民間教育機関）の自立とは何なのか、その役割とは、何なのかという問題を最近しきりに考えることが多くなりました。

公教育（学校教育）と民間教育（学習塾）との根本的な違い、その違いから派生してくる様々な問題。公教育の経営は、税金で成り立っていますが、民間教育である学習塾の経営は、そこに通う生徒たちの授業料で成り立っています。公教育は、緩やかであるかもしれませんが

が、国（文部科学省）の支配下に置かれ、指導・規制の中で運営が行われます。一方、学習塾は、保護者の支持・支援がある限り、自由な教育をすることができます。反面、その理解と支援がない限り継続は難しいということになります。

だから、塾経営者は、それぞれの異なる教育理念を持ち、他の塾とは違う、差別化をはかるための指導方針を掲げ、教育プログラムを開発し、個性的な教育活動を行っているのです。

私は、この公教育からの自立こそが、重要であって、公教育では成し得ない教育・学習活動を行うことを忘れてはいけないと思うのです。

学習塾も様々で、不登校生対象の塾もあれば、補習塾、進学塾、英語塾、数学塾などがあり、指導形態も一斉集団型、個別型、映像授業型、そして総合塾など、まるで「雑木林」です。その多様性があるからこそ価値があり、間違っても、統一したり集約したり、規制したりしないことが、重要だと思っています。

## 学習塾の原点とミッション

塾の原点といえば、私が学生時代に学んだ、吉田松陰が主宰した松下村塾を思い出します。かつて江戸時代には、たくさん塾（民間教育機関）があり、読み書きソロバンを教えていた市井の寺子屋など無数にありました。

一方、当時では、公教育とでも言うのでしょうか、藩のエリートたちが通った藩校（明倫館・時習館など）もあり、儒学を中心に学んでいたようです。

私が注目したのは、松下村塾と適塾、鳴滝塾、咸宜園などの塾では、現代の塾と同じく有料であったことです。米や物産などを、今で言う授業料として払いながら勉学に勤しんでいたのです。学ぶ教科も論語だけでなく、外国語（オランダ語など）や医学など、公教育（藩校）とは一線を画すもので、その根底には国を思う「志」がありました。やがては、天下国家を論じ、のちの開国そして明治維新とつながっていくのです。「志」つまりミッションを持った塾の存在に驚か

されます。

## ティエラと地球サイズの人づくり

私的なことではありますが、子どもたちの教育に携わって、もうすぐ40年が経とうとしています。ティエラというのは、スペイン語で「地球、大地、故郷」といった意味を持ちます。

現代は、情報化社会・グローバル化社会と言われ、世界化が一気に進んでいます。世界の各国で、資源獲得競争によ

る紛争や戦争、環境破壊、地球温暖化が進み、気候変動や大気汚染、水質汚染による生態系の崩れなど、地球そのもの（生命体である地球）が、人間の力で脅かされそうです。私たちが生きている間は問題ないかもしれませんが、静かに静かに深く深く潜行しているのです。取り返しのつかないことになりそうです。

私たちは、お預かりしている子どもたちの直面している様々な問題（成績を上げる、志望校に合格させるなど）に取り組むことだけでなく、将来、20年後・50年・100年後、子どもたちにとって、果たしてこの地球が、健康で幸せに存在しているのか、危機感を持って指導にあたりたいと思っています。

次代を生きていく子どもたちに、大人としてどういう責務があるかということを考えずにはられません。「地球の未来なしに、子どもの未来はない」のです。

このような環境の中で、果たして今我々が、行っている学習塾活動は、どうなっているのでしょうか。我々は、可能ならば教科指導活動のほかに、「志」を高く掲げ、それぞれの塾のオリジナリティをピカピカに磨き上げていき、社会に貢献できる人材育成をさらに進めていきたい。そして雑木林のような塾業界が競争しながらも、より高いレベルで混在し、共に発展させていくことができればよいと思っています。

最後に、ティエラコムの企業哲学の冒頭を紹介して、終わりとします。



増澤空氏

・一般社団法人 日本青少年育成協会 会長  
・株式会社 ティエラコム 代表取締役社長

## ティエラコムの企業哲学「地球貢献」

地球は、それ自身が「生命体」であるという。そこに生きる数百万種の生命の活動は、互いの生態だけでなく、大気や水の循環、土壌の変遷などにも深くかかわっている。それらは地球の呼吸であり、鼓動なのだ。各種の生命は、それぞれが独自の役割を持つ「細胞」として、地球という生命体を形づくっていると見えるだろう。人間も、その細胞の一つにほかならない。

1996年2月7日宣言

◀ 40周年を記念して発行された「地球サイズの人づくり」

